

《第 469 回（2019年12月12日） 子どもの本の読書会記録》 参加者：5人 文書参加：2人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『貸出禁止の本をすくえ!』 アラン・グラッツ／著 ないとう りみこ／訳 ほるぷ出版

物語の主人公、エイミー・アンは読書が大好きな小学4年生の内気な女の子。学校の図書室の常連で、愛読書『クローディアの秘密』のある場所は、もうすっかり覚えてしまっています。ある朝、いつものように『クローディアの秘密』を借りに図書室へ向かったエイミー・アンに、信頼できる学校司書のジョーンズさんは、衝撃的な言葉を口にします。「あなたの大好きな本は、この図書室で貸出禁止になってしまったの」

貸出禁止になったのは、『クローディアの秘密』1冊だけではありません。子どもたちに人気の本が、続々と何十冊も図書室から消えていきます。この事件の首謀者は、教育委員会の重鎮、スペンサーさん。「嘘つきや、ずるや、ぬすみの方法をおしえるような本は、子どもにはふさわしくない」という信念のもと、独断で図書室の本を手にかけていきます。しかし、子どもたちはこの措置に黙っていません。エイミー・アンはクラスメイトたちと協力し、貸出禁止を逆手に取ったあつと言わせる方法で、この理不尽なやり方に立ち向かっていくのです。

次に、読書会に参加したみなさんの感想を紹介します。

●教育委員会に本が貸出禁止にされるなんて聞いたことがない。登場する本は実際にある本だけど、タイトルを見ても「貸出禁止になるような内容だった？」という感じ。エイミー・アンは、4年生とは思えないほど大人びている。自分だったら、これだけ行動的にはできないなと思った。アメリカはやっぱり違うな。貸出禁止になった本を何冊か読んでみたが、大人が禁止するだけあって、面白い。

●どのシーンも映像として浮かび、痛快で面白かった。アメリカの学園ドラマを見ているかのよう。大人の理不尽を子どもに押し付けようとしたときに、逆に子どもたちが結束して、友情が深まっていくのがよかった。エイミー・アンの家庭環境が気になる。お姉ちゃんだからと我慢させられている。自分も長女だから気持ち分かるし、同じ思いをしたこともあるので、彼女の成長を応援しながら読めた。

●これがユーモアだなと味わいながら読んだ。日本の小学4年生より、格段にしっかりしている。章ごとに場面がまとまっていて、キャラクターもきれいに描き分けられていた。教育委員会の会議に子どもも出席できることには驚いたし、親もそれに向けてばっばと段取りしていたのはすごい。子どもたちが力を合わせて大人に立ち向かうシーンでは、みんなで一つのを仕上げていく喜びが感じられた。

●大人にこそ読んでもらいたい本。エイミー・アンたちは、ただスペンサーさんを追及するのではなく、スペンサーさんの良いところもきちんと捉えることができる、想像力のある子ども。この想像力は、読書によって育っていると思う。読み進める中で子どもたちの成長の過程がよく見えて、その成長を支えていたのは、実は本だった、というのがとても良かった。

●図書館が、あらゆる本をあらゆる人に読んでもらうための施設だということを再確認した。大人がいわゆる「ためになる本」を置きたがるということを良く描いている。エイミー・アンが規則を破り罰を受けるシーンでは、自分がやったことに対しての責任をきちんと取らされている。正しいことをするためには、正しいやり方でしないといけない。こうやって成長していくんだなと感じた。

●エイミー・アンにとって本は大切な宝物。その本が読めなくなった彼女の変わり様には驚くばかり。大人からするとくだらないと思う本でも、その時のその子にとっては面白い本なのかも。否定せずに、好きなものをいっぱい読ませてあげて、ほんのちょっと、「これも面白いよ」と勧めてみて……で良いのではないのでしょうか？色々な本を読んでみて自分で本の世界を広げて欲しいです。

次回 1月9日(木) 10:00～11:30 オーテピア4階集会室
□『ほくがゆびをばちんとならして、きみがおとなになるまえの詩集』
齊藤 倫／著 高野 文子／画 福音館書店